２００２年販売促進学会イタリア視察

鐘井　輝

成田空港から 12 時間、ミラノのマルペンサ空港に到着してから今回のイタリア視察が始まりました。様々な角度からアメリカの影響を色濃く受けているわが国ですが、育まれた伝統や文化に基づいて独自の考え方や路線を追求するイタリアに新鮮さを感じる視察となりました。

最後の訪問地ローマでのことですが、「大きくなったら何になりたい？」というイタリア人の子供に対しての質問の答えは「自分自身になりたい」でした。日本でしたら「お父さんみたいになりたい」、「お母さんみたいになりたい」あるいは「野球選手になりたい」、「お医者さんになりたい」などと答えが返ってくるかも知れません。ここからも自分自身の個性や主張を大変尊重する風土の一端が感じられます。

またファッションと歴史的建築物や美術品で世界中の人々を魅了するイタリアですが、このファッションについてもこの視察で再認識をすることができました。

それは「ファッション＝流行」が多くの人々がその時に流行しているものを身につけるということではないということ。年齢や体型など個人のチャームポイントや個性を最大限に生かすお洒落を自分なりに取り入れていくということです。従ってファッションは若い人だけが取り入れるものではなく、大人が自分自身を魅力的に演出する方法として生かされています。

それでは駆け足ですが、今回視察したミラノ（Milano）、ベネチア（Venezia）、フィレンツエ（Firenze）そしてローマ（Rome）について報告することにしましょう。

ミラノ（Milano）［2002,6,19 ～ 20 日滞在］

ミラノはイタリア経済、ファッション、デザインの中心地でイタリア北部の都といわれています。

首都ローマより国際便の発着回数が多いことからも同市の中心性の強さがうかがえます。パリと並んで世界のファッションの発信地であり、ミラノコレクションは有名です。様々な見本市が開催されその時期には人口が倍増するといわれています。　ファッションの都を象徴するかのような「糸と針」のモニュメントが市内中心部に設置されています。　　この洒落たモニュメントには「なるほど」と感心させられました。

ミラノでの主な視察先はサンタマリア・デレ・グラツイエ教会、ドウオモ（大聖堂）、ビットリオ・エマヌエーレⅡ世ガレリアです。

〈サンタマリア・デレ・グラツイエ教会〉

この教会はルネッサンス建築を代表する建物です。15世紀にドメニコ会の教会として建てられ、旧修道院食堂の壁画にレオナルド・ダ・ビンチの「最後の晩餐」が描かれています。「最後の晩餐」はキリストが「この中に裏切り者がいる」と言った瞬間が表現されているといわれ、遠近法テクニックや窓からの採光技術で見学者に感動を与えています。人体解剖なども含め、多方面で天才的能力を発揮したレオナルド・ダ・ビンチはビットリオ・エマヌエーレⅡ世の衣装デザインも行っていたようです。ミラノファッションの原点をかいま見たような気がしました。

〈ドウオモ（大聖堂）〉

大聖堂はミラノの中心部に位置し、14世紀に起工、19世紀に完成したイタリア中世最大の教会（高さ 108.5ｍ、奥行158ｍ、最大幅 93ｍ）です。教会は東向きに設計され、朝一番よく見えるようにゴシック様式で建てられています。

大聖堂内部は巨大な円柱が立ち並び広大な空間を生んでいます。またそこには 15世紀に作られた数多くのステンドグラスがはめ込まれています。

これらのステンドグラスには絵本の役割があり、一番下の左側から順に右へすすみ信者に絵で宗教を教えています。美しいステンドグラスの本来の重要な役割を知ることができました。

〈ビットリオ・エマヌエーレⅡ世ガレリア〉

ドウオモ広場とスカラ座（世界的に有名な格式の高いオペラ座、18世紀に再建され現在修復中）前広場を結ぶ壮大なアーケード（1877年完成）です。十字形の平面の上に巨大なアーチとガラスで建っています。数多くのブティック、カフェ、レストランが並び営業をしている所です。

ガレリアの近くにあるモンテ・ナポレオーネ通り、スピーガ通りなどには世界的に有名な専門店が数多く点在しています。（写真３セリーヌ、写真４ディオール）

今注目のドライビングシューズ専門店「TOD'S」でスリップオンタイプのローファーを時間の関係で買い逃したのが心残りです。

ベネチア（Venezia）［2002,6,21 日滞在］

ロメオとジュリエットの舞台となったベローナで休憩をとり、ベネチアに到着しました。

ベネチアはイタリアの北東部、アドリア海に面した「水の都」です。11～13 世紀の十字軍時代に現在の都市形態の基本を整え、14～15 世紀に繁栄の頂点を極め、「アドリア海の女王」の名をほしいままにしていました。絹・宝石・塩などの独占販売などで海運共和国として栄え、その海運技術や外交能力を発揮し、得られた富で「水の都」を彩っています。118 の島が多数の橋と運河で結ばれ、世界有数の観光都市を形成しています。

狭い水路を巧みに運転するゴンドラに乗って聞くことのできたアコーディオン＆カンツオーネにはベネチアならではの風情が感じられました。

ベネチアでの主な視察先はサン・マルコ広場、ドウカーレ宮殿、リアルト橋です。

〈サンマルコ広場〉

この広場はサン・マルコ寺院（総督の礼拝堂で、ギリシャ十字形平面を持つビザンチン建築の傑作、11～17 世紀）に面してドウカーレ宮殿、旧図書館、鐘楼に囲まれています。ベネチア共和国の公式広場の公式広場として歴史的な行事が行われてきました。イタリアでは 6 月 20 日から学校がが夏休みに入っており、バカンスシーズンで多くの観光客が同広場を訪れています。

〈ドウカーレ宮殿〉

ベネチア共和国の総督の邸宅兼政庁であった建物です。14～16世紀のゴシック様式でありながら軽やかで華麗な姿は「アドリア海の女王」を代表するにふさわしい建築物だといえるでしょう。同宮殿にある裁判所がシェイクスピアの戯曲「ベニスの商人」の舞台となっています。

同宮殿の北側には運河を隔てて隣接し、牢獄が建てられています。宮殿の裁判所で刑を言い渡された囚人が橋を渡りながら現世への別れを告げたところであることから「ため息の橋」と呼ばれています。この場所で我々も40℃近くの暑さのなかの視察で思わずため息をついていました。

〈リアルト橋〉

この橋は16世紀に完成した大運河のほぼ中央にかかる大理石の橋です。橋の上は多くの商店が軒を連ね、さらに周辺にも商店が営業を行い、ベネチアで一番の賑わいのある繁華街を形成しています。また運河沿いには市場も営業をしており、活気に満ちています。

フィレンツエ（Firenze）［2002,6,22日滞在］

フィレンツエはイタリア中部のアルノ湖畔にある古都です。まるで街全体が美術館であるかの様相を呈しています。（写真８）
市内のいたるところに栄華の後が残り、「花の都」にふさわしい優雅な雰囲気をたたえています。

またエトルリア以来の古い歴史を誇り、15世紀にはメディチ家のもとルネッサンス文化の花を咲かせ、ヨーロッパの経済・ファッションの中心地として各国に大きな影響を与えています。

同市内では大型バスの乗り入れ規制があり、炎天下の徒歩での移動を余儀なくされ、体力の消耗度の激しい視察となりました。

フィレンツエでの主な視察先はウフィツイ美術館、ベッキオ橋、ミケランジェロ広場です。

〈ウフィツイ美術館〉

この美術館は 16 世紀にメディチ家により造られました。メディチ家はフィレンツエを 3 世紀にわたり支配したのみでなく、類い希なる古代美術を愛好する芸術保護者でもあったのです。そしてこの建物を役所として使うとともに集めた美術品をギャレリア（廊下・トンネル＝ギャラリー）に置いたのが始まりです。天井に描かれているフレスコ画には今もスカーフや灰皿などの図柄のモチーフとして使われています。

そして現在はルネッサンスを代表する巨匠の作品を網羅する世界有数の美術館と評価されています。

レオナルド・ダ・ビンチの「三博士の礼拝」「受胎告知」、ベッロキオとレオナルド・ダ・ビンチの「キリスト洗礼」、サンドロ・ボッティチェッリの「ヴィーナス誕生」「春」「メダルを持つ若者の肖像」、ミケランジェロ・ブオナロッティの「聖家族と幼い洗礼者聖ヨハネ」、ラッファエッロの「ヒワの聖母」「教王レオ 10 世と枢機卿ジュリオ・デ・メディチと枢機卿ルイジ・デロッシ」、ピーター・ポール・ルーベンスの「イザベラ・ブラントの肖像」、レンブラントの「若い頃の自画像」、フランシス・ゴヤの「チンチョン伯爵夫人マリア・テレザの肖像」、ウジェーヌ・ドラクロアの「自画像」など数え上げたらキリのないくらいの世界的に有名なそしてどこか見覚えのある展示品は見学者を魅了しています。

〈ベッキオ橋〉

アルノ川にかかるフィレンツエ最古の橋であり、14 世紀当時の面影をとどめています。2 階建てで 1 階は貴金属店が軒を連ね、2 階はウフィツイ美術館の一部となっています。

〈ミケランジェロ広場〉

この広場は旧市街とアルノ川をへだてた丘の上にあり、市街のすばらしい景観を一望のもとに収めています。

特に夕暮れ時の眺めは素晴らしく、ルネッサンス都市の優美なスカイラインを堪能することができます。

ローマ（Rome）［2002,6,23 ～ 24 日滞在］

ガリレオ・ガリレイが落体の速度が物体の重さに比例す

るというアリストテレスの学説の誤りを実験により明らかにしたその実験場所、「ピサの斜塔」の視察後ローマに入りました。

イタリアの首都ローマは同国の政治・文化・学問の中心地であり、イタリア半島中部チベル川沿岸に位置しています。紀元前 753 年に建設され、アウグストウス帝のときには古代世界最大の都市として「永遠の都」と呼ばれ、また「すべての道はローマに通ず」といわれました。

壮大な古代ローマの遺跡、サン・ピエトロ教会をはじめとする大教会、各時代の美術館はイタリア 3 千年の歴史を物語っています。

ローマでの主な視察先はバチカン市国、コロッセオ、フォロ・ロマーノ、リスタイリング＆コンサルティング（Restyling & Consulting）社です。

〈バチカン市国〉

バチカン市国の中心にはカトリックの総本山であるサン・ピエトロ寺院があります。広大なバチカン宮殿の内部には歴代法王が集めたミケランジェロの「最後の審判」、ラファエッロの間にある「アテネの学堂」、八角形の中庭にある「ラオコーン像」など数えだしたらキリのないほどの世界屈指の美術作品が収蔵されています。

宮殿の外では衛兵が伝統衣装を身につけ警護にあたっていました。

〈コロッセオ〉

このコロッセオは古代ローマの円形球技場です。フラヴィウス家の名を不滅にするため、ヴェスパニアヌスにより着工されています。高さは 50 m、長径 188 m、短径は 156 m あり、観客席は中央の楕円形の競技場から天井桟敷までの階段により形成され、当時約 5 万人の観客を収容していました。

内部の競技場は大きな楕円形で木張りの床が敷かれていましたが、現在はその床を支えていた壁やその間の廊下が残っています。

このコロッセオで剣闘士と猛獣との闘い、剣闘士同士の闘いが行われていました。

〈フォロ・ロマーノ〉

フォロとは広場を意味しています。パラティーノ、カムピドリオ、クイリナーレの丘に囲まれたこの谷間はクロアカ・マッシマ（大下水道）の建設により干拓され、紀元前6世紀頃から政治、宗教、司法、行政の中心となり繁栄しました。ローマ帝国崩壊後、この場所は遺跡と化してしまっています。

〈リスタイリング＆コンサルティング社〉

コイン投げ伝説で有名な「トレビの泉」と「ローマの休日」でオードリー・ヘップバーンが階段を駆け下りたスペイン広場を視察後、イタリア郊外にあるリスタイリング＆コンサルティング社を訪問しました。

社長のルドヴィコ・カペランチ（Ludovico Cappellanti）氏から同社のコンセプトや業務内容の説明を受け、大手コンサルティングファーム、アクセンチュア（accenture）のベラルディ氏も加わり意見交換を行いました。

その時に交わされた内容のポイントは以下のものです。

・リスタイリング＆コンサルティング社の創立は 1984 年、現在 8 人のスタッフがいる。
・建築関係を専門にしている、進行過程で発生する法律問題についてもアドバイスしている。
・レストラン、喫茶店、病院、オートサロン及びファッション関係など多方面の建築に関わってきた。
・古代建築物は文化省の管理下に置かれているが、サンタマリア教会の床部分の改修を担当している。
・同社は店頭照明及び店内照明を大変重視している。
・経営に関するコンサルティングには直接関わっていない。専門の経営コンサルタントと連携して企業を支援している。
・デザイン料は建築コストの 30 ～ 40 % 請求している。
・将来日本の皆さんとプロジェクトを組み、クライアントの相談にのりたい。リサーチ関係の仕事も連絡して欲しい。今後共同で仕事ができることを願っている。

また、ベラルディ氏は「イタリアの商業全体の傾向として

気づく点は世界的ブランドのハイレベルファッションは好調であり、何の問題もない。しかし最近その下のレベルのファッションビジネスが郊外店化の影響を受けはじめつつある。」と述べられています。

最後に

以上イタリア視察を駆け足で報告しました。バスの移動中のレクチャーで小濱先生が今回の研修意義について述べられたのは「文化や環境からの視点で商業をとらえる重要性」でした。

私自身アメリカやアジアへは何度か視察した経験があり、これらのモノサシで商業ビジネスを解釈してきましたが、今回の視察で今まで持っていなかったモノサシを一つ手に入れたような気がしました。

また、前田先生の世界一の商店街である「ビットリオ・エマヌエーレⅡ世ガレリア」の定点観察に同行させていただいたことは貴重な体験だったと感じています。

今回の視察が終わり、訪問した地域のなかでミラノとフィレンツエをもう一度時間をかけて見てみたいと感じたのは私一人ではなかったと思います。

最後に一緒に楽しく有意義な視察をさせていただいた小濱先生、坪田先生、前田先生、井田先生、滝頭先生ご夫妻、門間先生ご夫妻にお礼を申しあげて、本報告の結びとさせていただきます。

「SPN 通信第 25 号」販売促進学会 2002 年 11 号執筆原稿